

再臨の主を待ち望む

マタイによる福音書 25 章 31 節～46 節

2025 年 12 月 14 日

松田 基子師

今日は待降節第 3 主日です。待降節というのは、神の御子イエス・キリストが、人類を救うために人の子として世に降り、この世界に生まれて下さったことを心から感謝し、クリスマスを待ち望み、心の備えをする時ですが、それと共に、そのことに勝って待ち望むべき事は、イエス・キリストの再臨です。

イエス様は人の子となられ、全人類の罪を負って身代わりの十字架にかかる下さり、贖いの業を成し遂げ、十字架の死から三日目に復活され、40 日にわたって弟子たちに現れて後、弟子たちが見ているところで、父なる神様の御許である天、すなわち永遠の世界に帰って行かれました。

その時、使徒言行録 1 章 10 節の証言は、
「白い服を着た二人の人がそばに立って「ガリラヤの人たち、なぜ天を見上げて立っているのか。あなたがたから離れて天に上げられたイエスは、天に行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになる」と告げました。イエス様は又おいでになる、再臨されるとの宣言です。

イエス・キリストの再臨は、何よりもイエス様ご自身が約束なさったことです。

マルコによる福音書 13 章 24 節以下で、イエス様は

「それらの日には、このような苦難の後、太陽は暗くなり、月は光を放たず、25) 星は空から落ち、天体は揺り動かされる。26) その時、人の子が大いなる力と栄光を帯びて雲に乗ってくるのを、人々は見る。27) そのとき、人の子は天使た

ちを遣わし、地の果てから天の果てまで、彼によって選ばれた人たちを四方から呼び集める」と言っておられます。

イエス様はこのことを弟子たちだけでなく、イエス様を十字架にかけるために捕縛した宗教指導者の代表である大祭司に対しても、彼の「お前はほむべき方の子、メシアなのか」(マルコ 14 章 61 節)との尋問に対して「そうです。あなたたちは、人の子が全能の神の右に座り、天の雲に囲まれて来るのを見る」(62 節)と答えられました。

このように、イエス・キリストの再臨の約束は、ご自身が宣言しておられることであり、聖書信仰の土台です。その表現を云々するのではなく、再臨が有ることが重要なことです。

聖書の宣言は、天地万物は創造主である神様が造られ、その歴史を導き、神様ご自身が歴史の到達点を設けておられ、その後、完全な神の国が到来するとされています。

そこで神様は、ご自身が計画された歴史の到達点に達した時、歴史を終結されるのです。その終結の仕方は、永遠の世界で神の右に座しておられる、即ち神の権威の代行者である御子イエス・キリストが、再び人間の世界に降って来られ、歴史の総決算をなさるのです。それがイエス・キリストの再臨です。

聖書の最後のヨハネの黙示録は、そのキリスト再臨の約束を記し、最後に 22 章 20 節、21 節で

「以上すべてを証しする方が、言われる。『然り、わたしはすぐに来る。』アーメン、主イエスよ、来てください。21) 主イエスの恵みがすべての者と共にあるように」と記して閉じています。

この様に、イエス・キリストの再臨は、聖書が強く訴えているのですが、さて、現実の私たちキリスト者は再臨待望の思いがどれ位あるでしょうか。理解しようと努めていますし、礼拝で告白

する使徒信条に於いても「かしこより来たりて、生ける者と死ねる者とを裁き給わん」と信仰を言い表しています。しかし、今日のキリスト者、私たちにとっては、なかなか主の再臨に向き合えない、身近な自分ごとにはなっていないのではないかでしょうか。

あのペトロ第Ⅱの手紙 3 章 4 節で言われている反対者達の問い合わせである「主が来ると言う約束は、いったいどうなったのだ。父たちが死んでこのかた、世の中のこととは、天地創造の初めから何一つ変わらないではないか」との思いがあるのではないかでしょうか。

このような言葉が発せられてから、更に二千年近くも経っているのです。再臨に対する信仰は希薄になっていても仕方がないと思うでしょう。

ペトロはそのような考えに対して 3 章 8 節で「愛する人たち、このことだけは忘れないで欲しい。主のもとでは、一日は千年のようで、千年は一日のようです。9) ある人たちは遅いと考えているようですが、主は約束の実現を遅らせておられるのではありません。そうではなく、一人も滅びないで皆が悔い改めるようにと、あなたがたのために忍耐しておられるのです」と言っています。

しかしながら、今日の世間一般的の考え方からすれば、イエス様の再臨、世界の総決算、神の国の到来ということは、道理に合わない荒唐無稽なこととして受け取られています。その影響を受ける私たちは、信仰が揺れてしまうのです。だからと言って私たちの信仰は、無理をして思い込まなければならないものではありません。ただそこに、これを信じて懸けていくのだという決断はいります。

信仰とは、結果を見てから信じるものではありません。信じて懸けて行った先に、神の約束の実体を得ることが出来るものなのです。幸いに

も、私たちの身近でも信仰の先輩たちの姿から、そのことを受け取って来ました。イエス・キリストに委ねきって、平安に召されて行かれた方々を見てきました。

そこで私は今回、私たちは使徒信条で常にキリストの再臨を唱えながら、なぜそれが私たちの喜びや心からなる待望になっていないのだろうかということを考えました。

その最大の理由として考えられることは、イエス・キリストによる裁きです。ヘブライ人への手紙 9 章 27 節に

「人間にはただ一度死ぬことと、その後に裁きを受けることが定まっている」という言葉と共に、コリント第Ⅱの手紙 5 章 10 節には

「わたしたちは皆、キリストの裁きの座の前に立ち、善であれ悪であれ、めいめい体を住みかとしていたときに行なったことに応じて報いを受けねばならない」との言葉が心に刺さってくるのです。

私たちはキリスト者になってからも、沢山の過ちを犯します。あのを傷つけた。この人を助けなかった。キリスト者になってからも、日々愛の足りなさを悔いるばかりです。こんな私では、とてもイエス様の再臨による裁きで、褒められる筈もなく、退けられるに違いないと、私たちは心の底で思っているのです。そのことが、キリストの再臨を積極的に求めようとしない原因ではないでしょうか。

それともう一つは、再臨への恐れの前に、自分の死に対する恐れがあります。自分の死を恐れるのも、その先に、再臨のイエス様に裁かれるという不安を抱えているからだと思います。

私たちはそのように心の底ではイエス様の裁きを恐れているのですが、ここで大切なことは、イエス様が人の世に人間として生まれて来られなければならなかった理由は、裁きではない事に立ち返らなければなりません。

ヨハネによる福音書3章16節からの

「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためにある。17) 神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によって世が救われるためである」という御言葉が神様の大宣言です。

私たちは、イエス・キリストの再臨、裁きも、神様のこの御言葉から受け取って行くべきなのです。

ではその観点から、マタイ25章の主の再臨によって羊と山羊に分けられるところを見て参りましょう。25章31節から

「人の子は、栄光に輝いて天使たちを皆従えて来るとき、その栄光の座に着く。そして、すべての国の民がその前に集められると、羊飼いが羊と山羊を分けるように彼らをより分け、羊を右に、山羊を左に置く」とあります。そして右側の羊組に、王なるイエス様は言われます。34)「さあ、わたしの父に祝福された人たち、天地創造の時から、お前たちのために用意されている國を受け継ぎなさい。35) お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせ、のどが渴いていたときに飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し、36) 裸のときに着せ、病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれたからだ」と。

その言葉に対して、右側の祝福を受けるために分けられた人々は、37)「主よ、いつわしたちはそのようなことをしたでしょうか」と問い合わせています。

すると、王は40)「わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのはわたしにしてくれたことなのだ」との答えが返ってきました。

続いて王は、左側に分けられた人々にも言いました。41)「呪われた者ども、わたしから離れ去り、悪魔とその手下のために用意してある永遠の火に入れ。42) お前たちは、わたしが飢えて

いたときに食べさせず、のどが渴いたときに飲ませず、43) 旅をしていたときに宿を貸さず、裸のときに着せず、病気のとき、牢にいたときに訪ねてくれなかつたからだ」と。

そのような王の言葉に対して、呪いを宣言された人々は答えました。44)「主よ、いつわしたちは、あなたがそのような状況におられたとき、お助けしなかつたでしょうか」と言葉を返しています。

すると王は45)「はっきり言っておく。この最も小さい者の一人にしなかつたのは、わたしにしてくれなかつたことなのである」と答えました。

この例えを語られたイエス様は、25章46節で

「こうしてこの者どもは永遠の罰を受け、正しい人たちは永遠の命にあずかるのである」と言われました。

私たちはイエス様の、この例え話を聞いて、自信を持って自分は祝福を受けるに相応しい羊組だと言える人がいるでしょうか。私たちはイエス様の御心に従って生きて行きたいと願っても、救われた罪人であり、自己中心で人の痛みを真に負うことなど、出来ていないことは自分が一番よく分っています。ですから、私たちはここで「ああ、私は再臨の主の前に立たされたら山羊の側に分けられる」と思い込んでしまうのです。そういう思いがある以上、再臨される主を待ち望むことは出来ません。

「主よ、私はまだ用意が出来ていませんから、もう少し待って下さい」と言いたいのではないでしょうか。

イエス様はここでそういうことを言っておられるのでしょうか。そうではないと思います。

イエス様が再臨されるということは確かな事ですが、ここではまだ再臨は起こっていないのです。イエス様は再臨が起こる前に、弟子たちに「わたしが再臨した時には、こういうことにな

るので、あなたたちは祝福の道を探しなさい」と言っておられるのです。

ここで祝福を受ける人たちは、王に対して「主よ、いつわたしたちはそのようなことをしたでしょうか」と問うています。それは彼らの無意識の行為でした。自分が良いことをしなければならない等との意識は全く無くて、そうせずにはいられなかったのです。彼らはイエス様に褒めてもらうためにしたのではありません。

では、そうせずにはいられなかったその心は、どこから出てきたのでしょうか。もともと性格が良かったのでしょうか。人間の生来の心からはそのような思いは出て来ません。それはイエス様に、日々しっかりとつながって、ただ一途にイエス様に信頼して、聖霊によってイエス様の心を頂いていたからでしょう。日々イエス様とつながっている時、聖霊はイエス様の心をその人の内に注がれます。その愛の霊に満たされると、イエス様の心が与えられ、そうせずにはいられなくなるのです。

羊と山羊に分けられる例えの真意は「わたしの兄弟であるこの最も小さい者にしたのはわたしにしてくれたことなのである」の言葉にあります。イエス様の心を心としたということです。そのために「日々イエス様とつながって、イエス様の心を頂く生涯を生きていきなさい。再臨はその延長線上にあり、わたしは決してあなた方を見捨てない。何も恐れることはない。ただ、わたしに信頼していなさい。その日にはわたしの義の衣を着せてあげよう」と約束されているのです。

パウロはテサロニケ第Ⅰの手紙5章23節～24節で

「どうか、平和の神ご自身が、あなたがたを全く聖なる者としてくださいますように。また、あなたがたの靈も魂も体も何一つ欠けたところのないものとして守り、わたしたちの主イエス・キ

リストの来られるとき、非のうちどころのないものとしてくださいますように。あなたがたをお招きになった方は、真実で必ずそのとおりにしてくださいます」と励ましています。そのようになれるのは、日々ただイエス様につながっているだけです。

昨年の夏のことでした。日本のキリスト教伝道のエバンジェリストとして、国内ばかりでなく海外でも奉仕をして来られた女性の先生にがんが見つかりました。周りの人たちは先生にどんな言葉をかけたら良いのだろうと案じるばかりでした。ところが先生は「イエス様のところに行けるのだから、お委ねして何にも心配していません」と言われました。そして今も日々をイエス様に全信頼し、委ね切って、平安に過ごしておられます。

私はその姿から、何もイエス様の再臨は構える必要はないのだ、今日を、今を、イエス様につながっていれば、それでイエス様が全てに責任を負って下さるということが分かりました。

私たちは、ただイエス様につながって、聖霊によってイエス様の心を頂き、イエス様の再臨を待ち望んで一日一日を歩んで参りましょう。

お祈り致します。

天の父なる神様。罪深い自分に目を向けると、イエス様の再臨は恐れるばかりです。でも、このような罪人を、イエス様は贖って下さり、ただご自身に信頼し、日々つながっているようにと言って下さることに感謝します。

イエス様につながり、イエス様の心を頂いて、イエス様に焦がれ、イエス様の再臨を待ち望んで生きる者としてください。

救い主イエス・キリストのお名前によってお祈り致します。　アーメン。